

螻蛄の斧

(とうろうのおの)

社会システム変化への介入 part 1

1990年 京都児童相談所 内外事情 第五回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

現場を離れた児童相談所の元実力者の話す中味が、二、三年で急速に古くさくなって行って…と聞かされた。一般論として「私の若い頃は・・・」とか、「私がいた頃の組織では・・・」というのが、懐古自慢話になりがちなのは分かっているはずのことだ。自制も利くはずのテーマだ。しかしそれでも・・・なのだと改めて、過去の人間が今を語ることの危うさを思う。私がここに書いているものはそうではないと強弁したところで、誰かがそう読めると言ったらそうなる運命にある。OBに情報は入って来にくくなるし、直接責任もなくなった仕事についてあれこれ言うのは、あまり勝算のある業ではない。それを承知で、だからこそ書き始めた連載である。

「いくら、自分が熱意を込めて関わった仕事でも、時と共に変化してゆくものだから・・・」、こういう言い方をしてしまえば話は簡単である。「今のことは今の人が考えて、取り組んだらいいことで、老兵は消え去るのみ」、こんな態度が潔いことだと語る言い回しがある。しかし、こういう言葉の背後にある冷たさには用心が必要だ。では、どうすれば懐古趣味にならないで、現在と互角に話し合えるのだろうか。

それは結局、テーマ（哲学、理念、原則）なのだと思う。その時々現象ではなく、底流にある原理のようなものが反映されているかどうか分岐点ではないかと思う。それが様々な具体事象の中に強く反映されることではじめて、風化、老化を押しとどめ、普遍に至ることができるのではないかと思う。

児童相談所を離れてから五年あまり、知的障害者更生相談所にいた。そこで取り組んだのは、知的障害への取り組みでも、療育手帳判定制度の見直しでもなかった。知的障害者自身と共に暮らす家族の抱える課題への援助だった。まだ、そんな視点から知的障害者行政に取り組む体勢は少なかつた時代だったが、テーマとしてははっきりと成立していた。

児童相談所の仕事とは違って、知的障害一点集中だったが、その人を取り巻く家族が抱える課題は、児童相談所で関わった家族のそれとさほど違いはなかった。そしてこの発想は後に、公務員職を離れ、児童福祉、障害者福祉の枠組みを離れても、引き続き「家族」はテーマの中心であり続けることになった。

今、全国十三カ所で継続開催している家族理解ワークショップの参加者は、母子保健の保健師、発達障害に関わる幼児教育現場職員、義務教育の中の教師達、高校、大学の教員。カップルや離婚調停に携わる人や弁護士。高齢者介護の現場と社会システム作りに奔走する人々。小児医療従事者、看護職、助産師、精神障害者の地域生活支援に関わる人など、多岐にわたっている。その理由は当然で、だれも家族なしには存在できなかったからである。家族焦点の仕事は限りなく普遍性を持っていた。

1990年5月

5/1 TUE 今月 28 日に京都府教育総合センターで開かれる教育相談講座・課題別の講師として話すことに関する打ち合わせにK研究主事来所。午後は児童福祉司三人と受付相談員といっしょに、業務統計について協議。夜、出版の企画（結果的にミネルヴァ書房「家族の居心地シリーズ」三部作になったもの）について、第二回目の話し合い。川崎君、柴田君、川畑君、早樫君と私。いろいろ出て、少し形らしきものが見える。

他所から依頼される仕事が増えてきていた。当然、業務に対する評判や、結果を出している事への外部からの評価なのだが、私の所属する組織はこういう事にほとんど関心がなかった。他府県への出張が目につくと、牽制されるくらいだった。もっともこの京都府教委の研修依頼は、身内にタダで使える職員がいるからと、渡りに船の感じも否定できなかった。

自分の職場や仕事をおろそかにしていた気は全くない。それどころか、この時期に働いていた人たちみんなに、その人に合わせたエールが送れていたと思っている。その仲間もみんな定年退職を迎えた。部下であった人たちも京都府には少なくなった。

公務員組織の人物評価に関して、昔から持論は変わらない。何も努力しない人間に給料をだらだら支払うことを、納税者が同意するわけがない。何かする人間を牽制するより、何も新しいことをしない人間にハッパをかける！

組織に愛着の持てる構成員からタレント

が輩出するのは素晴らしいことだ。その人達と、きちんとルーティンワークをこなす人がチームワークできたら、きっと良いゲームができる。

ただ、こういう理屈も、私だから放置されていたところがあったようだ。私の退職後には、同じ事をしていた元同僚は処分を受けた。私にはノーペナルティだったのである。彼のその後に著しい害があったわけではないが、こういう事しかできない組織管理者が、事なかれ主義以外の方針を持っているとは思えなかった。

5/2 WED ある人から「K大のSさんが困さんってどんな人か?と聞いていたが、どんなつながりがあるの?」と問われた。それからいろいろと妄想してしまって、まんざら悪い気がしなかった。

実は3月にもH先生からS大学の学生相談室でカウンセラーを何時間か引き受けてくれないかと言われて断っていた。

その時、俺もなかなかの者になってきたかな・・・と嬉しい気がしたのだった。そして、さあ今度はどんな用件だろうと、勝手に妄想を楽しんだ。

帰宅すると、連休中だけ貸してもらってきたファミコン（長年、我が家は禁止だった）に狂っている挑（次男）が「にいちゃん、急に耳が聞こえんようになって、医者へ行った。おかあさんもついていった」という。11時近くなって、「中耳炎やって、痛かったあー」と言って帰ってきた。

夜中、DVD「その男、凶暴につき」、「早春物語」の二本をみて、その後、原稿書きにワープロをさわっていたら朝になった。7時半過ぎに娘が起きだしてきたので、膝に抱えて茶の間に話した。そのまま「荻野目洋子の部屋で映画監督が自殺した事件」をやかましく喋っているレポーターの声を聞きながら眠ってしまった。

この頃の日常である。まだまだ他者評価は頭の中で駆けめぐっていた。誰かに認めてもらうなんてうっとうしい気がしているのに、認めさせたい気は大いにあるという矛盾。でも、それが原動力だったかもしれない。

児童相談所からの学会発表がほとんどなかった時期に、心理臨床学会で数年発表し続けたのも、ある時点で納得して止めてしまったのも同じ事だ。

三人の子の父親役割を十分に果たしている時間は多くなかったが、八歳（女兒）と一四歳（次男）、一六歳（長男）の父であることは、当たり前のように私を充たしている、公私とも安定を与えてくれていた。

5/7 MON 15年以上の付き合いになる年下の友人竹中尚文くんが、ずっと以前から欲しいと思っていたものが届くように手配してくれた。

「NATIONAL GEOGRAPHIC」アメリカの雑誌だ。1990年の年間契約ということで、1月号から4月号までがシンガポールから送られてきたが、その写真のすばらしさに惚れ惚れしてしまう。付録の地図が嬉しい。英語の部分をとばしてしまう僕にも十分楽しめる。

本誌に「お寺の社会学」を連載中の竹中君である。この時点でもう十五年つきあいだったことに驚く。以前も書いたが、彼が龍大の学生だったときに、シルクロードの旅というツアーでたまたま一緒になったのがきっかけだ。

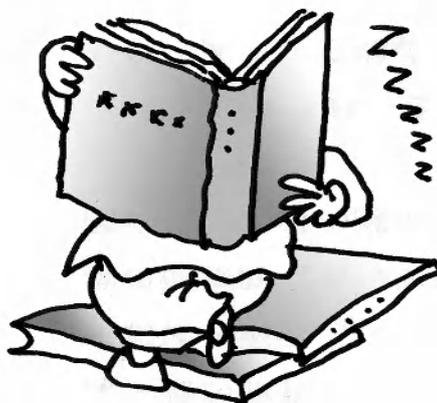
そしてナショナル・ジオグラフィックは今、日経ビジネス社から月刊誌として日本語版が発行されている。あの頃は、考えられないことだった。そして、だから輝いて

いたところもあって、定期的に日本版が届くようになった十年後、定期購読は止めてしまった。

5/8 TUE 決めておかないとなかなか面倒な専門書は読めない。持ち歩くのも重いし、つつい買ったのに読めていないという事態が発生する。それで火曜日の夜は、できるだけ仕事関係の読書をすることに決めた。そういえば昔、受験生の頃、こういうことをしょっちゅうやって、挫折ばかりしていたなあ。

当然のことながら、こんな記述の後に、定期的に専門書を読み続けた記録も記憶もない。読書に関して、いわば無駄読みが多く、情報や知識を取り込む読み方は本当に苦手だ。

直ぐには役に立ちそうにないことと、永久に役に立たないだろう知識への好奇心なら、右に出る者は居ないのではないかと思う。まあ、誰も右に出たいなんて思わないだろうけど。いったいつまで、役にも立ちそうにない事への好奇心を持ち続けるのだろう、私は。（答は多分、死ぬまでだ）



5/9 WED 桂南光さんのABCラジオ・パノラマ大放送におじゃまする日。月一度の出演だし、そこであまり相談の回答のようなことはやりたくないのに、一寸いい話くらいの中味で喋っているのだが、それでも聞いていて、ハガキをくれるリスナーがある。感謝である。

夜は4月から通い始めた編集者講座・講師は「広告批評」誌の島森路子さん。インタビュー（後藤久美子の事）の話で、いくつかうんうんと共感するところがあった。

この編集者講座通年クラスの受講は、私の生活のエンターテインメント部門だった。公務員であることと、こういう動きが自分の中では矛盾しない。むしろ、こういう事が大事なんだと確信さえあった。

世間は公務員だけで構築されているわけではないことを強く意識していた。親族に一人も公務員がいなかったせいもあるかもしれない。

今に至るまで世間は、官僚・公務員についていろいろ言うが、霞ヶ関だけではない、地方公務員のライフスタイルの社会的な限定が、問題解決能力を硬直化させてきたのだ。



民間に！などと小泉純一郎に叫ばせていないで、公務員自身をもっと権限の主体性

を駆使して、結果に責任を取る構えになればいい。させられていないで、自分が面白いと思うことをやればいいのだ

5/10 THU N児童相談所に居たYさんから、転勤の挨拶状。それに一時保護所統廃合に向けて、三児相の組合分会長が転勤させられたとある。

こういう文言を目にするとき、いつもある種の飲み込めなさを感じてしまう。ひょっとすると自分が置かれている状況が恵まれていて分からないのかもしれないが、とにかくなんか変な感じがある。結果だけ書くと、こんな事になるのかもしれないが、具体的な取組経過が持てて、そもそもの目的をそれぞれが考えていたら、これほどただの被害者的表現をしなくていいように思えてならない。

一時保護所の統廃合が、必ずしも合理化したことにはならないのは既に証明されている。事実や人材を大切にできない組織が栄えたためしはないし、人の育たない組織もまたそうだ。

「着眼大局着手小局」が、実行であるならば、残念ながらこのグチの出るところは「着眼小局無着手」ではないのかと言いたくなる。

統廃合問題がそれとして議論になりきらず、最後は時間切れで個々人の人事異動問題になってしまいがちだという不幸を、当局・組合両者が噛みしめなければならぬのだと思う。

繰り返し経験してきたことだが、公務員組織の様々な課題が、最後の最後には人事異動（一身上の都合）という個人の問題になって決着がつく。いよいよそうなった時には、どれほどの積み重ね経過が水泡に帰すことになっていても誰も構わない。ここに親方日の丸という長年の批判が集約されている。こういうものこそ、談合というのだと私は思う。

5/17-18 府三児相児童福祉司会議。三所の相談判定課長も出席して二日間。しかしどうも内容が感心しない。発言や提案が生き生きしていない。サイド・ブレーキを引いたまま運転しているような議論の仕方に思える。

そのベースが私に言わせると「相互不可侵条約」、暗黙の密約である。誰が何を言っても批判をしない、そのかわり自分の発言についても誰かに何か言われることは好まない。

この傾向は、特に中年を迎えた女性職員に多いように思う。そして迎合するように、何も言わない事なかれ主義の中年男性職員がいる。こんなことは続けていて良いものではない。カツを入れなくてはならない。

厳しいことを書いているなあと、今読んで思う。しかしこれは日誌の中の独り言だったわけではない。日常や会議でここに至る十年くらい、ずっとこうだったような気がする。

いわゆる大人の発言、大人の対応をしていると、その場は丸く収まって、和気藹々。でも、そんなことが目的だったのか？と振り返るとおかしいところに行き着くことになる。職業が個人の人生選択の一つである事は認める。しかしその仕事の持つミッションは、個人の見解とは無関係に存在する。

業務がますますハードになってきて、一方で児童福祉司の経験年数が浅くなってきたりすると、お互いを気遣うという美辞麗句にコーティングされた「いたわり合い(馴れ合い)」ディスカッションが始まる。そして対外的な防衛心だけで連帯したりすることになる。

それは児相や児童福祉司の話だけではなく、昨今の災害における政府の混乱にも

見て取れる。情緒的には分からないでもないが、そんなことで仕事を語ってしまうようになった自分たち自身を、弱体化していると自覚する必要があるのだと思う。

随分以前のことだ。近畿地方の同職者が集まる持ち回り会議で、他府県の若い女性心理職が、理屈の通らない話で、自分の上司を護ろうとするのを目の当たりにした。そのあまりにも人間関係だけに焦点化された若い職員の態度に、怒鳴りつけたことがある。それじゃ、身内ホステスじゃないかと思ったのだ。

住民ではなく、たまたま、そのときの上司である者のために、この人は何を言っているのだらうと許せなかった。その場では、私が撃感を買ったのだったが、こういう若者の意識の寄せ集めで未来が作られていくのはうんざりだった。

5/19 SAT 「発禁・カタルーニャ現代史」セスク著という大版のヒトコマ漫画本購入。筆者はスペインの風刺漫画家。ここに掲載された作品の多くが、検閲で×を付けられて発表できなかったものだという。それらの作品が大きな×印とともに掲載されている。

自分も漫画を描く身として、何とも言いようがない気持ちになるのは、原稿に直接×印を検閲者が書き込んでいる作品だ。自分の作品が、意見が違う者の手で、掲載を拒否されるのみならず、大きく×印を書き込まれて戻ってくるなんて考えられない気がする。

しかし振り返ってみると逆に、自分は誰かが×印を付けたくなるような作品の一枚も描けていないなあと情けなくなる。

風刺とか批評は、自分があからさまに前面に出る。そうでない評論風のもの、慣

用句や慣用感覚の使い回しで、時流に乗っかっているだけだ。

その場、その時期に、世渡り上手が駆使する言語や態度は、見える人には見えている。しかしその人達はたいてい優しい。

だから「彼にも事情があるんだろうから…」などとかばう。しかし、こういう妥協が産んだものの結末の一つが、フクシマ（原発問題）だったりしたのだと思う。

あの頃の私は、「団さん、こうした方が得ですよ。いや、そうしないと損をしますよ！」と忠告されても、「損しても構わないから、思うように選びます」と言っていたように思う。だからといって、自己犠牲の精神などであったわけではない。欲しいと思わなかったから、要らないと言っていたのだと思う。この経過にも、それなりの自己満足はあった。そして引き受けた結果の一つが50歳の退職だったかもしれない。

しかし今、それでは弱いのだと、今回の原発事故のことでつくづく思った。間違っていたからといって責任をとれない人に、責任を取らせようとするのは間違いだ。責任のとれない人に、そんな権限を与えていることに気づいている者が傍観するのは悪である。



「何が正しいかなんて分からない…、正

義なんて言う輩には、要注意だ！」等と、何も言っていないのと同じ事を繰り返していないで、その時々で、責任を取るか、責任を取らせるか、どちらかにしっかり立ち位置を定めなければならない。傍観者は基本、利己主義である。

5/22 TUE 家族療法訓練講座第3期が始まった。12人のいろいろな現場の人達と1年間付き合うことになる。さっそく金沢から毎週京都に通う男性に、健康な一般家族と面接をしてもらった。複数の人達と面接する大変さを十分味わい尽くしたような展開だった。

この京都国際社会福祉センター（K I S W E C）家族療法訓練（通年コース）は現在まで、受講人数の揃わなかった2回を除いて、延々続いている。初期は団、早樫、木村の三人で、その後、早樫と私の二人で担当して今に至る。

家族療法家を育成・訓練しているというより、家族療法訓練を受けることで、様々な分野に、家族を理解する人が増えることを目指している。

ここで通年コースや、短期集中WSコース（step 1, 2 夏・冬）を受講した人たちが、それぞれの出身地に戻って、地元で家族療法の継続訓練プログラムを開講してほしいと言いだめたのが10年以上前。その第一号が1990年代後半の青森県・弘前だ。

5/25 FRI 久しぶりの亀岡教師勉強会。参加者は9人と少なかったが、具体的ケースの処遇方針を一緒に考えた。原則にのっとりた仮説をどう立てるか、主に川畑くんとキャッチボールした。

児童相談所に来談するのは、基本的に保護者の意向。それ以外に警察のように、14歳未満の触法通告というルートもある。

(近年では虐待通告)。連携する機関ルートの仕事は、保健所との三歳児健診、1歳半健診などが主なものだった。

他に京都府北部の児相では、学校に向いて実施していた「学校教育相談」があったが、管内全ての学校から相談があったわけではなかった。管理者の意向や地域の習慣で、伝統的にケースのある学校とない学校に分かれていた。不登校は山のようにある時代に入っていたが、義務教育年齢の子ども達は学校が困り込んでいた。

そんな中で教員個人の判断で、正式な相談というより、学級運営上の教員の困り事相談を、非公式に受けられる窓口を意識して設定したのがこれだった。

保護者や学校管理者には内緒でも、ここで一緒に考えてみて、教師自身が現場でよい結果が出せればいいじゃないかと考えていた。

5/29 午前中はヤセ症の子の両親と面接。ボディ・ワーク、体の力を抜く練習をしてもらった。夫婦ともなかなか抜けない。次の面接まで、週一回家族全員でその練習時間を決めてすること。

いろんな事を試していた。結果の出そうなことであれば、流儀も何も、構わなかった。身体への関心は、心身症状と呼ばれるものが話題になったとき、どこからのアプローチにチャンスがあるだろうかと考えて、早くに頭の中にあった。

竹内敏晴さんの名著「ことばがひらかれるとき」に心酔したのは、舞鶴児童相談所に勤務していた時代。発達相談でいろんな偏りやこだわりのある子達に会っていた時のことだ。これがきっかけでボディ・ワー

クのプログラムに参加し、目から鱗の体験連発に遭遇する事になる。(この顛末は、拙著「ヒトクセある心理臨床家の作り方」金剛出版に書いた。

その頃からずっと、身体をテーマの援助実践には関心がある。体は結構大きなテーマであり、みんなの中に潜む弱さも引きずり出す。

5/31 受理判定措置会議。一時保護中の盗難事件のことを話し合う。ぼんやりしている人間の欠点が現われてしまった。彼の資質を全否定するわけではないのだから、どうか要所は押さえてもらいたいと思う。

スタッフの誰もがしっかりした人であることなど求めてはいなかった。いろいろな人が来談するところが、一色の人間集団では、不十分だと思っていた。だから気の付かない人も、下世話な欲望の人も、裏表のある人も、臆病な人も皆、チームの一員だった。

ただ、この時のように、うっかりした人のせいで、預かっている子供が事件当事者になるのは勘弁してもらいたかった。

一時保護所での事件の記憶と云ったら、その昔、保護中の子ども他児への暴力を止めようと手を挙げた職員があった。

これに激昂したその子(逆ギレだ)は、調理場から包丁を持ち出した。慌てて庁舎を飛び出した職員を彼は包丁を振りかざして追いかけて、それを見た町内の住民が警察に通報する騒ぎになった。

この事態を収束させるのに必要だったのは、この子に対する恐怖心のない者だった。怖がっている者が無理矢理、包丁を取り上げようとしたり、押さえ込もうとしたら更に事件が起きる可能性があっただろう。

みんな外に出た事務所で担当児童福祉司と二人、包丁で事務椅子を突き刺し続ける彼に、話しかけていたときのことは鮮明に思い出せる。彼にこれ以上のことをさせたくなかった気持ちは届いた。